

記録
16ミリ
カラー／35分

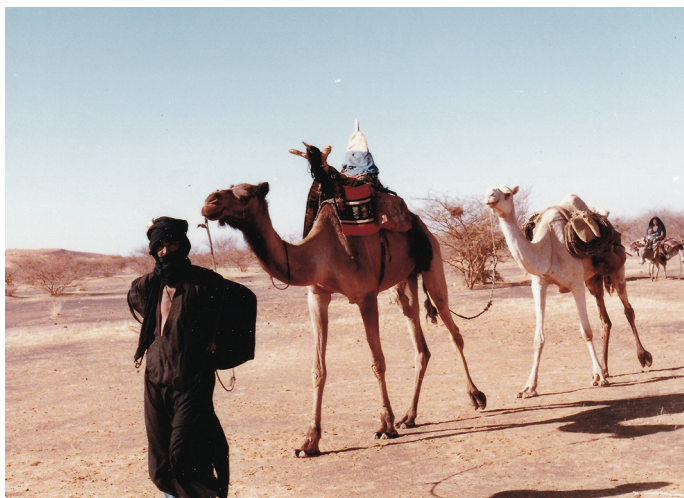
■企画
国際協力事業団

スタッフ

■製作
村山英世
■脚本
花崎 哲
■演出
村山正実
■撮影
北川英雄
■撮影助手
山屋恵司
■音楽
長沢勝俊
■録音
伊藤 亨
■解説
山本 學

文部省選定 1984年教育映画祭優秀作品賞 第26回科学技術映画祭
科学技術庁長官賞 第23回日本産業映画ビデオコンクール日本産業
映画ビデオ賞

砂漠という厳しい環境の中で暮らす人々にとって、乾期や旱魃にも
涸れない井戸は切実な願いである。ともすれば物の供与だけになり
がちな援助への反省から、どうすればそこで暮らす人々に喜ばれる
生きた協力ができるのか、映画は試行錯誤を繰り返しながら進めら
れてきた地下水開発の技術協力活動を興味深く感動的に描いている。



マリ共和国はサハラ砂漠の南西にある。この国の大半を占めるのは
サヘルと呼ばれる乾燥地帯で、牧畜が主な産業である。雨期には川
幅が100メートルにもなるニジェール川も、乾期に入ると動物が歩
いて渡れるくらいになる。遊牧民にも動物にも欠かせない水は地下
水、井戸水だけとなる。しかし、大旱魃の時、深さ30～50メートル
くらいまでの井戸は、すべて涸れてしまう。砂漠になった草原には
牛や羊の白骨が風に吹かれている。深さ100メートルくらいのとこ
ろを流れる地下水に達する井戸は、人力だけでは掘れない。

マリ政府は、本格的な深井戸の建設を国家開発計画の優先項目と
し、日本にその協力を要請してきた。調査地区には、過去に50本も
の井戸が外国の援助によって掘られたが、その殆どが壊れ、僅かに
3本だけが使われていた。どんなに素晴らしい援助でも、その土地
の人々がそれを使いこなし、維持管理していく体制ができなければ、
いつか砂漠の残骸になってしまう。真に長続きする技術協力をめざ
して、日本の調査団は様々な試行錯誤と工夫の末に、遂に深井戸の
建設に成功する。深井戸から汲み上げられる水は、遊牧民や動物た
ちにとって、まさに生命（いのち）の水である。人々の生活に直結
し、自立、発展を促す技術協力とは何かを、映画は問いかける。